

昔むかし、ひとりの兵隊が、戦争がいやになって軍隊を逃げ出しました。大きな森に逃げこみましたが、森の真ん中で、ひとりの魔女まじよに会いました。魔女は、兵隊に、

「ちよつと、あんた。あたしといっしょにおいで」といいました。そして、兵隊を、大きな木のところに連れて行って、いいました。

「さあ、この木をお登り。上に穴あながあるから、そこから穴の中をすべりおりるんだ。下に部屋があつて、金庫の上に犬がいる。犬をゆかにおろして、金庫の中のお金を好きなだけ取るといい。そしたら、また犬を金庫の上に乗せるんだよ。一番奥の部屋のテーブルの上には、火打ち道具が置いてあるから、そいつもついでにもらつときな」

兵隊は、いわれたとおりに、木を上つていきました。すると、てっぺん近くに穴が開いていて、木の中は空洞くうどうになっていました。兵隊は、穴をすべりおりて行きました。すると、部屋があつて、金庫の上に犬が一匹すわっていました。目が大きくて、にぎりこぶしほどもありました。兵隊は、

「やあ、おまえはいいやつだから、おれになんにもしないよな」といって、犬をかかえて金庫からおろしました。

金庫を開けると、中には銅貨がぎっしり入っていました。兵隊は、銅貨をポケットにつめこめるだけつめこみました。それから、金庫をしめて、犬を上に乗せました。

ふと見ると、奥にも部屋があつたので、兵隊は、次の部屋に入つて行きました。すると、やつぱり金庫が置いてあつて、その上に犬がすわっていました。その犬も目がにぎりこぶしのような大きさでした。

「やあ、おまえもなんにもしないよな。さっきのやつだつて、なんにもしなかつたんだからな」

兵隊はそういって、犬を金庫からおろしました。

金庫を開けると、中には銀貨がぎっしり入っていました。兵隊は、さっきの銅貨をポケットからぜんぶ出して、かわりに、銀貨をぎゅうぎゅうにつめこみました。それから、金庫をしめて、犬を上に乗せました。

すると、奥にもうひとつ部屋がありました。入つて行くと、金庫があつて、その上に犬が

すわっていました。前の二匹とそっくりでした。

「ははあ。おまえたち三匹は仲間なんだな。おまえもなんにもしないよな」

兵隊は、犬を金庫からおろしました。金庫を開けると、中には、金貨がぎっしり入っていました。兵隊は、銀貨をみんなポケットから出して、かわりに金貨をつめこみました。それから、金庫をしめて、犬を上に乗せました。

兵隊は、初めの部屋にもどって、ほくほくしながら、穴をよじ登っていきました。半分まで登ったところで、上から魔女がいました。

「火打ち道具も持って来たかい」

それを聞くと、兵隊は下に飛び降りて、一番奥の部屋に走っていきました。テーブルの上に火打ち道具が置いてありました。それをふところに入れて、また穴を上っていきました。

穴の外に出て木から下りると、そこにはもう魔女はいませんでした。

兵隊は、ポケットの金貨で、いい服を買って、世の中を旅してまわりました。ちようど一年たったとき、持っていた金貨をぜんぶ使い果たしてしまいました。

ある晩のこと、兵隊は、宿屋のベッドに入ろうとしましたが、明かりがなくて真っ暗でした。そこで、ポケットを探すと、あの火打ち道具が手に触れました。ちよつとこすつたら、とつぜん、三匹の犬があらわれました。木の中の金庫の上に座っていた、あの目玉の大きな犬たちでした。

「ご主人さま、おのぞみはなんでしょう」と、三匹は、声をそろえていいました。

「ああ、トランクにいっぱい、お金がほしい」と、兵隊がいうと、犬たちは、

「承知いたしました」といって、消えました。兵隊がトランクを開けてみると、金貨がぎっしりつまっていました。

こうして、兵隊は、騎士のような服を着て、騎士のようにぜいたくに暮らし始めました。

あるとき、兵隊が散歩していると、お姫さまが馬車で通りかかりました。兵隊は、夜になると、火打ち道具をこすりました。たちまち、三匹の犬があらわれました。

「ご主人さま、おのぞみはなんでしょう」

「眠っているお姫さまを連れてきてくれ」

そのとたん、もうお姫さまは、兵隊のベッドで寝ていました。夜明け前、兵隊はまた火打ち道具をこすって三匹の犬を呼び出しました。

「ご主人さま、おのぞみはなんでしょう」

「お姫さまをお城に帰らせてくれ」

朝になると、お姫さまは、自分のベッドで目を覚ましました。そんなことが、毎晩続きました。

二週間たったころ、お姫さまは、王さまにいました。

「わたし、このところ毎晩、ある宿屋に泊まっている騎士のベッドで寝ているの」

「ゆめでも見たんだろう」

「いいえ、ゆめなんかじゃないわ」

王さまは、家来に命じて宿屋を探させ、兵隊を見つけて、お城に連れてこさせました。

「この男か」

「ええ、この人です」

王さまは、兵隊に、

「いったいどうやって、わしの娘をおまえのベッドに連れて行けるのだ」と聞きました。兵隊は、答えました。

「お姫さまに、わたしの心がおどるからです」

王さまは腹を立てて、兵隊をろうやにぶちこみました。八日の間、兵隊は、ろうやの中で水とパンだけで過ごさなくてはなりません。そして、九日目に、死刑の判決が下されました。

別のせまいろうやに移されて、兵隊はひとりぼっちでした。すると、ろうやの小さな窓から、宿屋の小僧が顔をのぞかせました。小僧は、

「いったいどうしたんです。心配してたんですよ」といいました。兵隊は小僧にいました。

「ひとつ走り行って、おれの火打ち道具を取って来てくれ。壁にかけた上着のポケットに入ってるんだ」

小僧は、すぐに、火打ち道具を持ってきました。

「ありがたい。おれのトランクには金貨がどっさりつまっている。そのトランクも部屋に置いてあるものも、ぜんぶおまえさんにやるよ」と、兵隊はいいました。

つぎの日、王さまは、三百人の家来たちに守らせて、兵隊を首吊り台まで連れていきました。兵隊はいいました。

「王さま、処刑しよけいされるときには、だれでも願ねがい事ができるものです」

そして、たばこを吸すいたいいました。王さまはゆるしてやりました。兵隊は、ポケットから火打石を取りだしてこすりました。たちまち、三匹の犬があらわれました。

「ご主人さま、おのぞみはなんでしょう」

「あの連中にかみついて、やつつけてやれ」と、兵隊はさげびました。三匹の犬は、家来たちにかみついき、追い散らしました。

王さまは、三匹の犬に追いかけられながらさげびました。

「助けてくれ。おまえを娘と結婚けっこんさせてやるから。すぐに王にしてやってもよいから」

それから三日ののち、兵隊とお姫さまは結婚式をあげました。結婚式のお祝いわいいでは、三匹の犬もごちそうにありつきました。ナプキンをして、ナイフとフォークを持って。三匹は、「ご用があれば、いつでも呼んでください」といって、消えていきました。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話28 オーストリア』飯豊道男／ぎょうせい